

# 伊江御殿墓



とても大きな墓だね。  
伊江家が首里王内で  
重要な家系だった  
ことがわかるね。



幅が約11メートル、奥  
行きは約17メートルも  
あるんだよ。



## 県内最古級の亀甲墓



正面

伊江御殿墓は第二尚氏第四代尚清王の第七子朝義(伊江王子)を初代とする伊江家の墓です。

伊江家四代の朝敷が「墳地」(墓地)をもらい、1687(康熙26)年に五代の朝嘉が志を継いで墳墓(墓の本体)を造営しました。

墳墓は斜面を切り開いて造られた石造りの墓室と、その前面に擁壁と石垣で区画された

「サンミデー」と「ナー」からなります。

琉球石灰岩の切石で構築し主要部は白漆喰で仕上げ、墳墓正面から南へ緩やかな石段が延びています。亀甲墓の基本的構成要素を備えたものとしては県内最古の墓の一つです。保存状況は良く、築造年代が明らかな初期の亀甲墓の典型として歴史的価値が高く重要です。





26°13'33.5"N 127°43'32.2"E

国指定重要文化財(平14.12.26)

あら かき け じゅう たく

# 新垣家住宅



観光ガイドブックで見たことがあるよ。



主家は19世紀後半には建てられていて、明治の末頃に現在の屋敷構えに整えられたと考えられるよ。西側にある「テ・ブルシーサー」は有名で、その建物が焼物の作業場だったんだ。



## 壺屋焼の中心的な役割を担った陶工の家



新垣家住宅

新垣家は17世紀に湧田、知花、宝口の3つの窯が壺屋に統合された頃に、読谷から壺屋に移住して登り窯を築きました。代々、親雲上の称号を有し、住宅は壺屋陶業の中心的な存在として、1974(昭和49)年まで使われていました。

沖縄戦の戦火から奇跡的に免れた約400坪の屋敷内には住宅、作業場、離れ、登り窯、

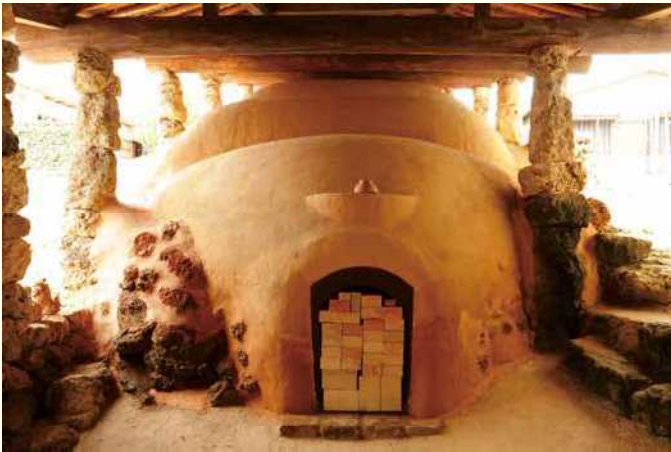
井戸(カー)、陶土精製用の沈殿池、フール、石垣などが残っています。住宅は19世紀後半までに現在の形になったものと考えられ、主屋(ウフヤ)と台所(トングワ)が一体となっています。

伝統的な壺屋陶工の住宅形式を知る上で唯一残された貴重なものとして重要文化財の指定を受けました。





■ 登り窯



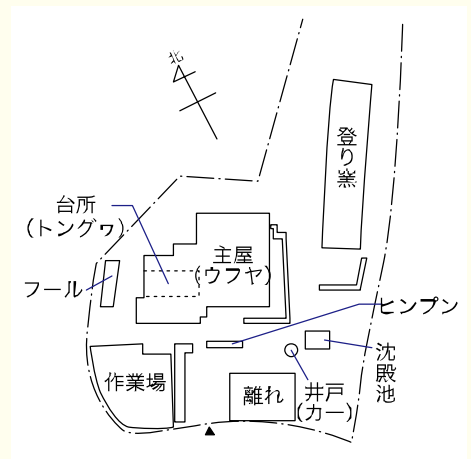
■ 登り窯(たき口)



■ 作業場



■ フール



※個人所有の文化財です。静かに見学しましょう。  
一部公開エリアについて開館時間中のみ見学可能です

26°12'45.3"N 127°41'34.4"E

な かん だ かり ひー じゃー

# 仲村渠樋川



すごく立派な  
樋川だね。  
今でも使われて  
いるのかな？



今は農業用水として使われ  
ているよ。今でも水が豊か  
に湧いているね。解説板も  
設置されているから、じっく  
り読んで欲しいな。



## 五右衛門風呂も付いている珍しい樋川



仲村渠樋川(正面)

沖縄島南部の仲村渠集落から海岸に向か  
って降りる傾斜地を切り開いて建設された集  
落共同の水場で、「ウフガー」と呼ばれました。  
当初は松の木の樋一本を据えた簡単な造りで  
ましたが、1912(大正1)年に津堅島の石大工  
に依頼し、翌年にかけての工事で琉球石灰岩  
の石造りとなりました。西側を男性用の「イキ  
ガガー」、東側を女性用の「イナグガー」とする  
大小二組の水場が南に面して並び、それぞれ

洗い場と水槽からなります。イナグガーの東  
には、共同風呂が設置されました。山側には  
野面積みの擁壁を築き、擁壁沿いには湧き水  
を導く暗渠があります。擁壁とイキガガーと石  
畳道に囲まれた三角地に水の神を祀る拝所  
が設けられています。水場前の広場に隣接す  
る石畳道を上ると集落に出ます。仲村渠樋川  
は、集落の大切な用水施設として丁寧に作ら  
れています。





26°08'43.3"N 127°47'34.4"E

たか ら け じゅう たく  
**高良家住宅**



中国との交易でこんな立派な住宅が建てられたんだね。



仲村渠親雲上は一回目の交易の利益で家屋を建て、二回目で石垣を築いて、三回目でお墓を作ったと伝わっているよ。それだけ利益があったんだね。またこの住宅は離島に残るものでは建築年代が古い住宅なんだ。



## 中国交易と鯉漁で建てた豪邸



■ヒンプンと主屋(ウフヤ)

高良家は船頭主屋と呼ばれる旧家です。琉球国時代の末期に公用船の船頭職を勤めた仲村渠親雲上が中国交易で財を築き、19世紀後半に建築しました。当初は茅葺き屋根でしたが、鯉漁で景気の良かった大正時代に赤瓦葺きとなりました。主屋(ウフヤ)は寄棟造り赤瓦葺きで、台所(トングウ)が主屋(ウフヤ)内

にある、非分棟型の民家です。その前面にヒンプンが立ち、背後にフルがあります。また、屋敷を囲む石垣は互いの凸凹がぴったりはまるよう精妙に整形されたサンゴ石を積み上げて出来ており、非常に美しいものです。ヒンプンには、長方形に切ったサンゴが使われています。



二番座



二番裏座



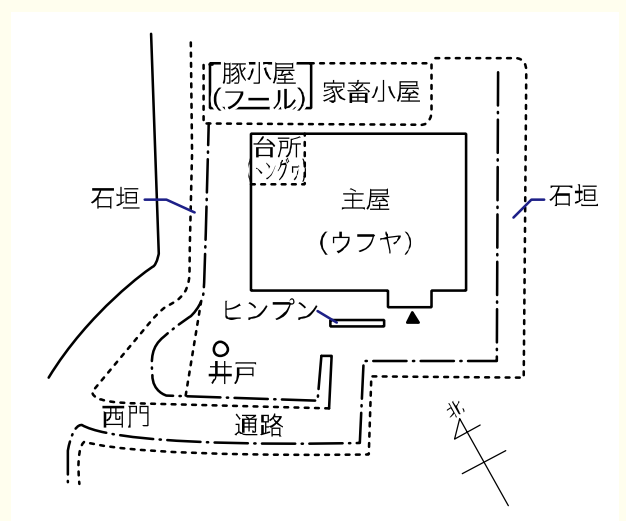
石垣



主屋(ウフヤ)



主屋(ウフヤ)と家畜小屋



※有料ですが一般公開しています 26°10'37.6"N 127°17'34.8"E



国指定重要文化財(昭47.5.15)

# 旧仲里間切 蔵元石牆



「蔵元」は、お酒を造ると、るではなく、甘の後場のことだよ。

蔵元の跡地は1946年から1983年まで、美崎小学校の教室として使われていたんだ。建物跡から出土した瓦には現代の赤瓦の他、黒い瓦も出ているから、蔵元時代の瓦だったと考えられているよ。



## 美崎小学校に隣接する昔の役場の石垣



旧仲里間切蔵元石牆

この蔵元の最後の建物は、1739(乾隆4)年に建てられ、石牆はそれから24年後の1763(乾隆28)年に完成したといわれています。1756(乾隆21)年に尚穆王冊封使節一行の船が台風のため真謝泊港沖で遭難した際、村人が一行を助け水と食料を与えて、介抱した場所と伝えられています。

石牆は琉球石灰岩とサンゴ石を積んだもので、蔵元跡の敷地約1750㎡を取り囲ん

でいます。石垣の高さは南側3.3m、北側2.7m、厚さは下部約1.8m、上部約1.2mで、南側に正門、西側と北側に通用門を設けてあります。門は切石による布積み、その他の部分は相方積みで、正門に残っている礎石から木造の四脚門があったと考えられます。また、通用門は石造アーチ門で石牆より一段高く積み上げてあります。





通用門(北側)



通用門(西門)



正門



全体(東側より)



旧仲里間切蔵元石牆(遠景)



26°21'16.3"N 126°48'27.7"E